

## 現代社会における塾と学校の関係 に関する一考察

廣石 典梨恵

### 序章 このテーマを選んだいきさつ（省略） 第一章 塾の実態

さて、塾とは何か。塾の定義についてまず考えてみたい。事典によると「小・中学生を対象とした教育・訓練等を公教育の枠外において行っている施設の総称として使われる用語である。（中略）大学受験に失敗した者を主たる対象として発達してきた予備校も塾的存在であるが、それは対象が大学受験を目指すものであるということだけでなく、法的に各種学校に位置づけられている点において塾とは異なるものである。同一の主体が塾と予備校の両方を経営している場合も見られるが、両者は概念上は別のカテゴリーとして扱われている。」とある。

ここで塾という場合、学習塾に限定したい。家庭教師・通信教育は個人指導が基本となり、実態が把握しづらいためである。また、おけいこごとここでは省略することとした。というのも、おけいことは年齢層も分野も幅広く、やはり実態を把握するのは困難と思われるからだ。以上の理由から、特に断りがない限り、塾とは学習塾を指すこととする。

一九八五年の小学校学年別通塾率は一年生が六・二％である。

学年が上がるにつれ一〇・一％、一二・九％、一五・四％、二一・一％、二九・六％となり、全体が一六・五％となる。

私の予想では、塾に通っている児童は多くても数％だったもので、この結果は意外なものとなった。どうしてこんなにも多くの児童が塾に通っているのだろうか、という疑問が生じる。

一つは、学校に児童が満足していない場合である。この場合、私が考える主な理由は才能のある児童に対して日本の学校が十分に対応していない場合、学校で児童の興味を満たす努力が不足している場合や、児童の能力や関心が多様化しすぎて学校の限界を超えてしまった場合、などである。

次に考えられる理由は児童が遊ぶ場を求めて、あるいは自分の居場所を求めている場合である。この場合は遊び相手が塾に取られてしまっているため、自分も塾に通わなければ仲間に入ってもらえなくなるというのが入塾の動機となる。

他にも、学校の授業の進度が速すぎて追いついていけない、授業は分からないが自分の力だけでは解決できないということも考えられる。

後ほど類型について触れるので、その説明をしたい。「有名校受験を目的とした進学塾、学校の授業の補習を目的とした補習塾、進学コースと補習コースを併せもつ総合塾、いわゆる『落ちこぼれ』や登校拒否児を対象とした救済塾。そのほかに、人格形成塾、生活塾、遊び塾と称せられるべき塾があるが、これらは、厳密には、学習塾のカテゴリーには入らない。」

文中もこの定義に従って進めていくものとする。

それでは、各々の塾がどのようなものか雰囲気伝えるため

に具体例をいくつかあげてみたい。

まず、登校拒否児などを受け入れているフリースクール代表として東京シューレの場合を挙げてみよう。これは前述の分類によれば救済塾にあたる。「学校と大変異なる点は、子どもとスタッフの関係である。学校では、先生が威張っているいやだと子どもたちはよくいう。教師側からいえば、日々子どもに苦勞させられ、忙しく、悩みばかりあり、けっして威張っているという感じがしないと思うが、子どもがいうことは当たっている。評価権・決定権をもち、命令し、説教し、アゴで使い、となり、罰を与え、いやみをいい、呼びずてができる、ということとは、そういうことなのである。」<sup>10)</sup>

総合塾経営者の下村氏は、「マンモス塾といわれている塾と対極にあるような塾、たとえば、もっと地域に密着した塾などが伸びて来ている。受験生だけを対象に受験テクニックのみを教えるというのではなくて、赤ちゃんから社会人までとか、生涯教育を担当できるような文化センター的な役割を担うことのできる塾ですね。ですから地域の文化活動に対しても、開かれてある塾というのが、これからの知育全般を引き受けてゆく条件になるでしょうね。」と述べる。

補習塾の経営者工藤氏の方針は「子どもと徹底して付き合うということ（中略）。たとえば障害を持ってようと、突っ張ってしようと、学校へ行ってまいと、いろんなことに関して、くるものは拒まない。

僕は楽しさとか肩の凝らないというのを、うんと考えてます。僕は授業をやっても学校とちよっと違うのは、プロですから、な

るべく楽しく肩が凝らないようにという工夫はしてます。」<sup>11)</sup>だそうだ。

同じ補習塾の経営者でも八杉氏の方針は「六十四歳のおばあさんが小学校四年生の勉強をやって何で恥ずかしいのかという考え方なんです。

きょう何をどこまで教えなきゃいけないということを取っ払っちゃいますと、とっても面白く何か楽しめるわけです。つまり、一緒に勉強ができるということですよ。」<sup>12)</sup>

「ぼくは塾で『まちがうことはいいいことじゃないか』と言い続けて来た。『忘れることは人間の特権だからおおいに結構』と、忘れることを叱らなかつた。おかげで、子どもたちはリラックスして対応してくれるようになった。（後略）塾では、わからないければわからない部分まで掘り下がつて調べ、『わかるどころ』『わからないところ』の境界を掴む。その境界線が指導要領とやらでたとえ何年前に履修しなければならぬと決められている部分であろうとそんなことは関係ない。

ぼくの所は二百人ちかくいるけれども、二百人全部平等にやったら体が持たない。そうかといって、ものすごく苦しんでいる子、あるいは誰かの力がどうしても必要な子なんかが現にいるわけです。そりゃあ、ぼくは徹底的に注ぎ込んでやる。えこひいきだよ。まあ、全部の人間と平等に付き合うことはできないから。ぼくはそれでいいと思ってるんだけどね。だって、そうしなかつたら一人一人と結局『個』としてかわれなくなっちゃう。それじゃ面白くやれない。」<sup>13)</sup>と説明する。

救済塾経営者桜井氏は「それから、教科目の学習と同時にいろ

んな作業——作業というよりも労作教育というのを取り入れてあります。それは、自分たちの身の回りのいろいろなこと——風呂をまきでわかすとか、まき割りをするとか、畑も少々つくってする、鶏を飼ってめんどうを見る、あるいは小屋を建てたり新しい校舎をつくったらその回りの側溝を埋めたりとか、土木工事から何から、やれることは何でもやろうということ、若い先生たちが率先してやるのについていて、見よう見まねながら、とにかくいろいろなことをともにやっていたということ、で、今日に至るまで続けています。

生徒の中には字が読めない者がたくさんいます。(中略)古典を用いまして——私の尊敬する人物の一人、内村鑑三の書物の中から一番手ごろな『後世への最大遺物』という小さな本を選んで、新入生にはそれをまず最初に読ませて、その中に出てくるむずかしい漢字や何かを繰り返し、繰り返しドリルする。これを『マラソン・ドリル』と名づけて、百題出して、百題全問正解するまで何度でもやり直す。一題間違えても、その一題のためにもう一回最初から同じ問題を全部やり直すというようなことを繰り返して徹底して一年間やってみたんですね。そうやっていくうちに、むずかしい漢字に対する恐怖感がなくなりました。』と述べる。

各々の塾がどれだけ異なるのか分かっていただけだろうか。

ここで少し授業料について触れてみたい。『文部省調査』によると、通塾者が学習塾に支払った一ヶ月当りの経費は、小学生の平均で七千八百円となっている。ただ国立教育研究所の調査(結城忠ほか、参考文献)によれば、これについては塾類型

による差が大きい。進学塾や総合塾においては、他類型の場合よりも、授業料がかなり高いという傾向が見えている。』

補習塾経営者の大沢氏は「私どもは、ほんとに生きていければいいぐらいの気持ちで考えておりますので、週三回で小学生の場合、七千円なんです。」と説明する。

同じ補習塾経営者でも八杉氏の場合は「月謝ははっきりいって私のところは上限が一万円なんです。このお二人と同じで、高かろうというふうに出すという、良かろうというふうに見えてくたさるだろうということは、よくよく知ってるけども、どうしてもそこまで踏み切れない。それから母子家庭、父子家庭は四割というのが一応の基準ですが、それでも辛かったならば、どうしてもきたい人は相談ください、と。ですから、ゼロから一万円と想っていただけでは結構です。」とのこと。

救済塾経営者桜井氏は「私のところはちゃんとがっちりお金をいただいています。月謝が月六万円、あと寮費、生活費は三万円、毎月九万円ずつです。教師の月給は五万円です。一緒に生活していますから、生活費、住居費は別途無料支給ということとです。」と述べている。

救済塾経営管理者の和田夫人は「月謝はお母さん方が決めてくださって、くださるものをそのままいただくということで、私の方から幾らぐらいいたきたいということは一度も申し上げたことがございません。お母さん方が決めてくださいました。

私どもでは、お預かりする子どもさん以外に、御家族でちょっと泊めてくださいという方がときどきいらっしゃいます。んですね。(中略)お金のある人がくださる場合の目安としては、

一日三千円程度くださる方がいらっしやいますというふうに申し上げています。そうしますとその割合で、『それじゃ、三千円お払いしましょう』とおっしゃる方もいらっしやるし、『ありませんけれども、よろしく願います』とおっしゃって、お金なしでいらっしやる子どもさんもいらっしやいます。』と述べる。ここに私の疑問の一つに対する答えがあるように思われる。教育費を余分に払ってまでも自分の子どもに知識（その動機はよい中学・よい高校・よい大学に入るためであつても）をつけさせたいという親心がここにはあるように思われる。全ての塾の料金が支払えないほど高いわけではない。また、授業料をいただいているからこそ、その期待に応えるだけの授業を行いたいと考える塾もある。

そもそも、公教育は義務教育期間は無料だといわれているが事実は少し異なる。八杉氏の言葉を借りると「今年度の国の文教予算は四兆五八四八億円。このうち五〇％の二兆八六一億円が義務教育国庫負担金で、そのほとんどが教員給与だそうだ。教育費の歳入としての内訳は、国庫支出金、地方交付税、都道府県税であり、歳出はその八〇％内外は教員給与だという。」ことだ。

「また、公教育でも授業料の高い私立学校の存在を認めている以上、塾は金がかかるから機会均等の精神に反するといっているのは筋が通らないであろう。」とも言われている。

以上のことから、授業料を取る取らないにこだわるのではなく、児童の学びたいという意欲を支援し続ける場の必要性を確信する。その場合が学校（公教育）であるのか、塾（私教育）で

あるのかという差であるにすぎない。

塾の歴史的背景を見てみよう。「予備校が第二次世界大戦前からあったのに対して、塾、特に学習塾が顕著になってきたのは昭和四〇年代の後半以降のことであり、それが一種の社会問題として重視されるようになったのは昭和五〇年代以降のことである。（後略）」最近では「全国で学習塾は推定六〇万か所、都内だけで五万か所、一小学校あたり約十か所というのが現状」だそうである。

さて、これだけ話題の塾の規模はどの程度のものか。事典を引くと「生徒数が二―三名の家庭塾もあれば、数千名を優に超える企業塾もある。一般的には、進学塾が最も規模が大きく、以下、総合塾、補習塾、救済塾の順である。『文部省調査』には、一学習塾当りの平均在籍者数は「三四・八人」とある。

また、「教師」は「身分別構成では大学（院）生が二九・二％、学校教員が四・七％で、その他が六六・一％（内訳 教職経験のある者一八・二％、ない者四七・九％）となっている（文部省調査）。性別では、男性が圧倒的に多い。年齢層では、三〇歳代以下で大半が占められている」そうだ。

大里氏は「私たち塾がなぜこれだけ認められ、子どもたちが喜んで塾にくるかということとは、若い先生がいる。そして休当たり的な指導をしているということだと思ふんです。

私たちの場合には、自浄作用がありまして、不適格な教師はどんどん首を切れる。ところが学校ではそういうことができない」と述べられている。

最後に「指導教科」は「小学生対象の場合は、算数が最も多



い（八六・九％）。国語がこれに次ぎ（五七・九％）、その他の教科が二〇％前後となっている。<sup>2)</sup>のである。

## 第二章 文部省と塾

事典には「塾問題は臨時教育審議会でも取り上げられ、一九八七（昭和六二）年四月に出された第三次答申において『塾など民間産業への対応』について、次のような提言が行われている。

（提言省略）塾の存在そのものを否定するのではなく、むしろ肯定する方向が出されている。<sup>3)</sup>とある。

また、最近の動向では、文部省は塾を学校の中に導入しようとしているように思える。というのも、二〇〇二年から小学三年生から高校三年生まで、総合的時間が始まるが、ここで英語を扱う場合、塾の力を借りてはどうかと同省は提案している。

しかし八杉氏は「いわゆる教育の自由化というふうになつて、えらい目玉になつてゐるようですが、文部省認可に塾をしようとか、塾も学校として認めてしまえなんていう無茶苦茶なことをいう人がいますけど、ご勘弁願いたいわけです。」と述べる。

文部省の寺脇研氏は、生涯学習課長の時に「九十七年の六月、新聞に『文部省が塾を認知』と大きく報道されたことがあります。正確に言えば、塾を認知したわけではありません。塾の存在を正式に認識したのです。いままでは認識すらしていなかった。学校教育関係者は、塾の存在について云々する前にまず、塾を必要としない学校教育にしていくながら先決だと、建て前で対処

してきました。しかし、現実には大半の子どもが通っているのだから認識はせざるを得ないのです。<sup>4)</sup>と述べている。

これからの塾と政府の関係はつかず離れずであつて欲しいと願う。両者の結びつきが強まるほど塾は学校に同化していく。そこには塾のよさが見出せない。塾が学校に組み込まれるとき、その割合が大きいほど各々の存在意義を無くしていくだろう。

## 第三章 学校の魅力・学校で学ぶもの（省略）

### 第四章 学校と塾の違い

日能研学力調査レポート（一九九一年実施）を次に示す。このレポートによると、小学校五年生の男児生徒に「学校と塾のどちらが好きか」という質問を行ったところ、「両方好き」と答えた者四〇％、「学校の方が好き」と答えた者三三％、「塾の方が好き」と答えた者二七％という結果が得られたそうである。学校または塾が好きと答えた者は六割に達するわけで、これらは塾と学校に相違点が見られるための結果であろう。この章では、学校と塾の相違点について考えてみたい。

まず一つ目は需要の違いである。野村氏は「豊かな現在になりますと、市民は必ずしも日本国民としてだけの教育を望むだけでなく、むしろわが子の教育、自分の子どもがどういう立場に立つて生活できるのか、そういう一人ひとりの子どもに對する教育需要を持ち始めたんじゃないか。そういうものに對して国家としての教育機関、学校が応じることができなくなつてきている。」と述べられている。

二番目は進路指導力の相違である。大里氏は「優秀な先生は

留年ということでもなん年か続けて三年を担当することもありま  
すけれども、普通は二年か三年に一度進路指導をやるという巡  
り合わせになります。ところで現在の受験の内容を見ますと、一  
年一年変わります。(中略)学校の先生方はそれに対して十分な  
資料、十分な知識を得られないまま進路指導を行っている。と  
いうことで大胆な指導とができないわけですね。怖いわけです。  
私たち塾の場合には、それが専門ですので、とにかくそのお子  
さんの適性とか、将来の進路とか、様々な要因を考えたらうえで  
的確に指導する。ぎりぎりいっぱいのところまで指導して行く。  
ところが学校の場合は二段階三段階ぐらい低めに押さえて行く。  
そこで子どもたちには非常に不満が残って、進学した学校で爆  
発する。」と説明する。

三番目に権力の有無が挙げられる。八杉氏は「塾には権力は  
ないが、学校にはある。学校を支えているのは権力という土台  
石ではないか。それも、家庭における『父』という存在のよう  
に個としての権力ではなく、格段に強風に組織され制度化され  
た国家権力だ。塾は無権力だからこそ、先ののべたように地域の  
の父母ともカミシモぬいでつき合ってもらえるし、子どもとも  
生のままで交われる。」と述べている。

四つ目は選択権を上げることができる。永瀬氏の言葉を借り  
れば、「学校の場合には、教育の機会均等といっていますが、実  
は機会均等ではないんですね。例えば、たまたま埼玉県新座市  
の何々町に住んでれば何々中学校へ行かなければいけない。生  
徒も父母も自分の意思で学校を選択することができないわけ  
です。まして学校の教師を選択するなんていうことは、不可能で、

与えられた器に入らざるを得ない。」となる。

## 第五章 塾のメリット・デメリット

まずデメリットから挙げていきたい。奥地氏は「山村留学や  
牧場・農場体験も効果ありとされた。一九八三年十月、登校拒  
否や家庭内暴力の子を集め、半死半生の目にあわせる体罰と虐  
待によって教育していた戸塚ヨットスクールであいつぐ死者が  
出た。その後も、不動塾(一九八七年・埼玉県)や風の子学園  
(一九九一年・広島県)でも、『矯正』のための体罰によって子  
どもが死亡している。」という極端な例を紹介している。

次に、学校と塾の活動時間が重なってしまう点が挙げられる。  
これは特に放課後に見られ、塾はクラブ活動や委員会活動、係  
活動などと時間帯がぶつかってしまう。森下先生のクラスの場  
合「児童会の役員になることを非常に嫌がるようになりますね。  
私立の中学校でも内申書を非常に重視して、そういう活動をや  
ったとかやらないとかが、合否の参考になるような場合がある  
らしくて、合格するために三役に立候補するという子どももい  
るのはいますが、実際にはそういう活動はやりたがらない。

そういう課外活動だけならまだしも、体育の授業に対して非  
常に参加が鈍ってくるというか、出たがらない。しょっちゅう  
サボるといいますか、結構、学校のほうでは、体育を休むとき  
には母親の連絡書を持たせてくださいというようなことを指導  
しますので、なかなか欠席することはできないのですが、学校  
へきてお腹が痛いといわれると、担任のほうもついつい休ませ  
てしまうということがあります。もっとひどくなると受

験の前一週間、二週間、学校をバツと休んでしまします。学校へこなくなつて、その間ずつと塾にはしつかり毎日行つてゐる。』となつてしまつてゐる。

それから帰りが遅くなるので、トラブルに巻き込まれることも見落とせない。尾木氏は「これは現に去年あったのですが、ある塾を中心として、かつあげ事件が連続して起こりました。塾を終わると九時半とか十時ごろになりますので、そこで突つ張つた連中が待っていてかつあげをやっていく。それから、塾で非行のグループが横の連絡を取つて広がっていくような実態とかが、練馬でありました。」という事例を紹介する。

四つ目は、前章で述べた生活のリズムを作る学校という点とは逆に生活のリズムを崩すという点を挙げられる。森下氏は「子どもたちがいうのは、『やっぱりつらいんだ』と。『塾通いを続けながら学校へきて、生活していくことは厳しいんだ』というようなことを、子どもたちはいいます。まさに、それは『先生助けてくれ』という悲鳴ではないだろうかと僕は思つてました……(後略)」と現状を憂へてゐる。

五つ目は学校と塾を併用することで児童・生徒から真摯な態度を失わせてしまうという点である。尾木氏は「子どもたちが塾へ行くのは学校だけの勉強では不安で、もっと勉強をわかつていっていただくわけですね。ところが塾で一生懸命勉強してるのかなと思うと、子どもたちは学校では『俺は塾へ行ってるからいいや』というので、あまり一生懸命聞かないわけです。塾のほうでは塾のほうで、『学校で聞くからいいや』というんで、結局、どっちも一生懸命聞いてないんですよ。」と報告する。

森下氏の話では「五年生の新しい教科書、新しい単元に入つて勉強を始めても、すでに習ったことばかりある。授業がやりにくいというのは、子どもたちが非常に荒れるからなんです。子どもたちは、もうすでに知っているから、わかつてゐるから、黙つて聞いていようというふうにしてくれるわけではないのです。わかつてゐるから面白くないし、いつまでもわからない子どもがいるとバカにする。手遊びはするし、無駄口はしゃべるし、非常に授業としては成立し難いというか、やりにくい。そういう状態がずっと続くわけです。当然、担任のほうも、その子どもたちにいろいろ指導したり、話しかけたりして、何とか授業を工夫して、その子たちをも含めて楽しく過ごしていけるような授業を作ろうと努力はするわけですが、結局、テストとか、そういうものに結び付く肝心かなめのところへくると、全部知ってるものですから、少しも興味がなくなつてゐるわけですね。

補習塾に関しても、やはり、先取りで教えていくから、『ああ、それ知ってる』とか、『それ塾でやった』とか、子どもたちは平気でいいます。勉強は学校でやるのではなくて塾でやって、学校は遊ぶところ、気を抜くところと思つてゐる子どもたちが、非常に多いのです。」ということだ。

六つ目に児童は自信がつくと何でもスムーズにいつてしまふということがよくあるが、その自信を塾が奪つてゐる場合である。ただし、一方的に塾が悪いのかといへばそうではない。学校で自信をなくす子もいる。自信をなくしている子をどれだけフォローしていけるかという問題は教師の資質によるところが大きいのではないだろうか。

最後に子どもの遊び時間が減ってしまうこと。

次はメリットについて考えていきたい。尾木氏は「本来、塾の機能かもしれないのですが、『勉強をやる気が出た』とか、『わかるようになってきた。塾のおかげだ』という子が、現にたくさんいます。(中略)いい塾というのがあると、大変協力関係を持ちたいと思う」と評価する学校教師もいると述べている。なぜ塾なのかといえば、駒野氏は「英語、数学の持っている教科の性質上、いままでのがずっと積み重なってこない、いまのことがわからないという問題があります。例えば、英語の場合、二年生のときに受け身の問題をしっかり教えて、その段階ではクラスの子がほとんどわかっていたという実績があったとしても、三年生になって、またほかのことを習っていくと受身を忘れてしまっているという子がいるんですね。(中略)学校の放課後というのは、いま非常に忙しいので、その子どもたちをなかなか集めにくいということもある。もう一つは、子どもたちに学校で『誰ちゃんと誰ちゃんときて勉強しなさい』というのは、たとえ英語病院と名を付けても、子どもたちはやはり嫌なんですね」と説明する。

二つ目は永瀬氏が言うには「広い地域から生徒が集まってくるので、素晴らしい仲間とも巡り合える機会が多い」ということだ。

三つ目は落合氏の言によると「消極的な意味で塾が時間つぶしにいいと言っただけじゃなくて、やはり、家の中にまで入りこんでいるような、悪い環境から守ってやることができますし、しかも、自分の好きな教科の学習に時間をさいたりしながら成長

していくわけです。」ということだ。

## 第六章 なぜ塾は栄えるのか

以上のような意見から(意見省略)、私は次のように考える。一、国民が塾を渴望しているため。学校の授業は学習指導要領を基に進められている。もし、学習指導要領に合わないような能力の子ども(学習指導要領を越えている場合と劣っている場合)は、学校以外の学習の場を確保するしかない。その場所が大衆向けで、安価な塾ということになったのではないか。

二、日本の国民性が、自分に必要性を感じなくとも同じ道を選ばせるため。日本人は、他の人と同じことをしているとき安らぎを感じる。つまり、特に塾へ行く必要性を感じていなくても、まわりが塾に行き始めると塾へ行っていない自分に不安を感じるのである。

三、地域の教育力が衰えたため。学校と家庭の共通点は、どちらも自分を評価する点にあると思う。正確には家庭で評価しきれないところを学校が評価してその結果を家に知らせている。子どもは常に評価されていれば、耐えず緊張していなければならぬ。まだ地域の教育力が強かったころは「この子にはこんないいところもある」と評価をし直してくれる大人がいたが、今はそれを期待できない。学校と家庭の結びつきの強さから、それ以外の場を求めたのかもしれない。

## 終章 塾は本当に必要か

工藤氏は「塾なんていうのは、なくなってしまう方がいいわけ

で悪なんだと僕は思ってます。

それはなぜかといえば、公教育が教育全体を考えているのに対し、塾というのはどうしても部分たらざるを得ないからです。全体に対して部分でせめぎ合いをしているわけですから、全体を考える側のほうが、基本的にむずかしい諸問題を抱えることは、はっきりしているわけですので、教育の本流は公教育であると考えます<sup>(1)</sup>と述べる。

一方で幸路氏は「補習塾は、個別対応の特色を生かすことで、いわゆる「登校拒否、家庭内暴力」等の悩める生徒への対応ができる。

なぜなら、この生徒たちがそこに至る迄の原因、家庭はさまざまで、決して一様ではないからだ。それ故、個別的な対応をせざるを得ないのだ。彼等は、学校のみならず家庭の落ちこぼれとして存在し、どこにあっても異分子としての自分を見い出すことしかできない。生活していくことそのものが苦痛となってしまうのである。その結果、自分の殻の中に閉じこもるか、むやみやたらに暴力を振うかして、容易に自分の心を閉こうとはしないのだ。(後略)<sup>(2)</sup>と述べる。

以上のように塾に対して賛否両論あるが、私は塾は必要だと思う。確かに塾が子どもに必要以上に負担をかけていることもある。それでも、なお、塾が持つ役割には学校の限界を補うようなものがあるのではないかと思う。

まず、選択権を子どもと保護者に確保するという意味において塾は必要だ。確かに、東京都品川区の小学校が今春より学区を廃止する。その時どのような特徴を持たせるか、その参考に

塾はなり得るだろう。何より学校を選択できても教師の選択にまで至っていない。また学校と対峙することで学校の方向性を常に考えさせるものとしての位置付けもできそうだ。教師は塾に負けないような指導案を考え、向上していくことが重要である。

それから家庭の変化も挙げられる。家は以前ほど広くない。子どもが勉強する環境を維持するのは難しいだろう。例え維持できたとしても、家には様々な誘惑が潜んでいる。漫画、テレビゲーム、テレビ、お菓子……。これらを置いていない塾こそ、勉強にふさわしい環境といえるのかもしれない。何より、塾には母親の小言や兄弟の不満げな声が存在しないのである。机も椅子も完備されている。学校にも机はあるが、それにはたいがい落書きがしてあり注意をそがれてしまう。

子どもにとってよりよい環境を作るために、塾と学校がよい意味での競争相手になる。それが私の理想とする塾と学校の関係である。

## 補章

### 「留意点」

中条氏(学習塾全国連合協議会副会長)は「私は塾は悪であるという言葉を聞いたとき非常に残念に思いました。学校のなかでもいいものもあるし悪いものもある。いい先生もいるし悪い先生もいる。塾のなかにもいい先生もいるし、悪い先生もいる。もう一つは、お母さんたちのなかでも、非常によくわかったお母さんと、どうにもわかりの悪いお母さんがいる。この三

者がやはり共同の土俵で話し合わなければ、子どもの問題は解決できないのではないか。塾は全部悪い、学校はいい。こういう形では、いまの塾の問題は解決できないのではないか。」と忠告する。

「学校の欠点」(省略)

「諸外国の教育」(省略)

脚注

- (3) 奥田真丈・河野重男監修『現代学校教育大事典④』ぎょうせい 一九九三年

- (2) 『新教学大事典第四巻』第一法規出版 一九九〇年

- (10) 奥地圭子『学校は必要か 子どもの育つ場を求めて』NHKブックス 一九九二年

- (12) 下村博文『塾 そのありのままの姿 コミュニティ塾創造をめざして』学陽書房 一九八四年

- (17) 国立教育研究所内塾問題研究会編集『シンポジウム 塾と学校』ぎょうせい 一九八五年 タメ塾塾長 工藤定次(1)一九八五年一月二五日於国立教育研究所

- (18) 前述『シンポジウム 塾と学校』東進会塾長 八杉晴実(1)

- (1) 八杉晴実『シリーズ人間と教育 塾は学校を超えられるか』三一書房 一九八三年

- (19) 前述『シンポジウム 塾と学校』ニューライフ・カレッジ塾長 桜井淳司(2)一九八五年二月二二日於国立教育研究所

- (16) 前述『シンポジウム 塾と学校』府中エミール学院長 大沢稔(1)

- (20) 前述『シンポジウム 塾と学校』はじめ塾塾長 和田重正(2)

- (22) 濱田陽太郎編集『現代教育講座第六巻 現代日本の教育環境』教育・学習環境はどう変化したか』第一法規出版 一九七五年

- (15) 前述『シンポジウム 塾と学校』教学館塾長・学習塾全国連合協議会常任理事 大里茂(3)一九八四年二月二二日於国立教育研究所

- (11) 寺脇研『なぜ学校に行かせるの?』日本経済新聞社 一九九七年

- (28) 前述『シンポジウム 塾と学校』江古田教室 野村(3)

- (14) 前述『シンポジウム 塾と学校』東進スクール塾長 永瀬昭幸(3)

- (24) 前述『シンポジウム 塾と学校』東京都立川市立幸小学校教諭 森下計二(4)一九八五年二月八日於国立教育研究所

- (7) 前述『シンポジウム 塾と学校』東京都練馬区立石神井中学校教諭 尾木直樹(4)

- (8) 前述『シンポジウム 塾と学校』東京都新宿区立牛込第一中学校教諭 駒野陽子(4)

- (23) 前述『シンポジウム 塾と学校』落合学院長・全国私塾連盟理事長 落合清晃(3)

- (6) 前述『シンポジウム 塾と学校』集英塾塾長幸路秀人「教育力の再生をめざして―補習塾は教育にどう関わりを持てるか―」